



その8

編組製品に見る縄文時代の植物利用と加工

金沢大学 古代文明・文化資源学研究センター特任准教授 佐々木由香

21世紀の現在、私たちは縄文時代から続く道具を使い続けている。土器や石器を使っている人はいないだろう。だが、植物素材のかごやざる、敷物を使っている人は都心部に住んでいても多いのではないだろうか。植物素材でなくとも、本来は植物素材で作られたざるの形を模したプラスチック製やアルミ製の水切りざるを使ったことがあるだろう。では、なぜ土器や石器はなくなつたのか、かごやざるは現代まで残つたのか。その答えのヒントは、縄文時代の植物資源利用と加工技術にありそうだ。

縄文時代の編組製品とは？

かごやざる、敷物などは、編組製品と呼ばれている(1)。編組製品とは、文字通り「編む」と「組む」技術によつて作られた製品をさす。通常、考古学では、木で作られていれば木製品、漆が塗られていれば漆製品というように製品の素材を製品名に冠するが、編組製品は技術が名称に付されている。編組製品の利点は、編み目の間隔を狭くすればざるになり、広くすれば篩になるように、技法や素材の間隔を少し変え

れば様々な用途に使える点である。さらに藁を使えば袋のようなかごになり、竹を使えば重い物でも運搬できる堅くかつちりとしたかごになるように、材料を変えれば同じ技法でも異なった用途に使用できる。このため、技法と材料となつた植物をいかに選択するかは、編組製品の

機能を考える上でも重要な要素といえる。日本列島で一番古い実物の編組製品は縄文時代早期の初めの約1万5000年前のもので、琵琶湖の湖底の滋賀県栗津湖底遺跡から出土した。出土した製品は小さく、形態が不明な破片であるが、編み組みが確認できる。完全なかご

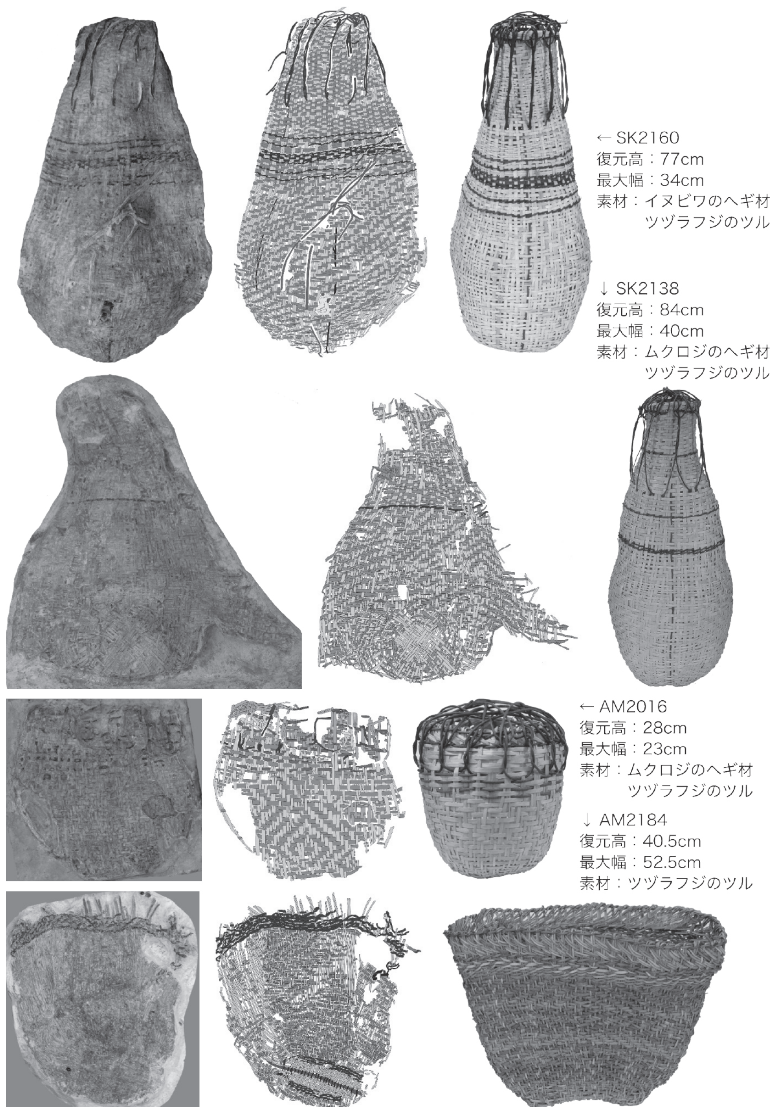


図1 佐賀県佐賀市東名遺跡出土の縄文時代早期の編組製品と実測図、復元品(佐賀市教育委員会 2017)

の形の最古の出土例は、佐賀県佐賀市東名遺跡から出土した編組製品で、縄文時代早期の終わり頃の約8000年前のものである(図1)。

東名遺跡は、国内最古の湿地性貝塚である(2、3)。遺跡全体の地下水位が高かったため、通常の遺跡では動物や菌類などによって分解してしまつて残らない動植物遺体が多量に出土した。かごなどの編組製品は極めて良好な状態で残り、約740点が出土した。1遺跡から出土した編組製品の出土数としては、現在のところ世界一の点数である。貝塚域から出土した長軸が40センチ以上残存している製品を1個体と数えると、約244個体となる。同様に貝塚域で出土した土器のうち底部が3分の1残存しているものを1個体と数えると、土器の最小個体数は約240個体で、編組製品と土器の出土個体数はほぼ同数であった。この数をみても、いかに編組製品が多く使われていたのかがわかる。

東名遺跡で圧倒的に多く出土した編組製品はかご類で、約730点が出土した。特にイチイガシなどのドングリ類を水漬けするための高さ約60センチ以上の大型のかごが多く見られた。水漬けた目的としては、虫殺しの可能性が考えられている。低地に穴を掘り、そこにドングリ類を入れたかごを、水位の変動などで流されないように細い杭で留めたりして設置していた。編組製品は多様で、ドングリ類をいれる大型のかごだけでなく、運搬用と思われる高さ約50センチ以下の小型のかごやざる、敷物、縄類、それらの素材となる植物を束ねた素材束も確認された。

東名遺跡は、編組製品の素材植物の調査数で

も全国一であり、発掘調査が終了して約15年経った段階でも継続して素材植物の調査と分析が行われており、約400個体分の素材植物が明らかになっている。

編組製品の素材植物と技法の特徴と時期変遷

現在の九州のかごの素材で、圧倒的に多いのはタケである。しかし、縄文時代早期の日本列

島にはタケは生育していなかった。分析の結果、東名遺跡の大きなかごはイヌビワやムクロジといった落葉広葉樹の木材を割り裂いて作製した素材で作られていた。図1最上段のイヌビワのかごは、上部は「ござ目」、中央は「もじり」、下部は「網代」という技法で編まれている(図2)。素材も、本体の「ござ目」と網代の部分はイヌビワのヘギ材、黒い部分のもじりの部分はツル植物のツヅラフジというように、部位ごとに

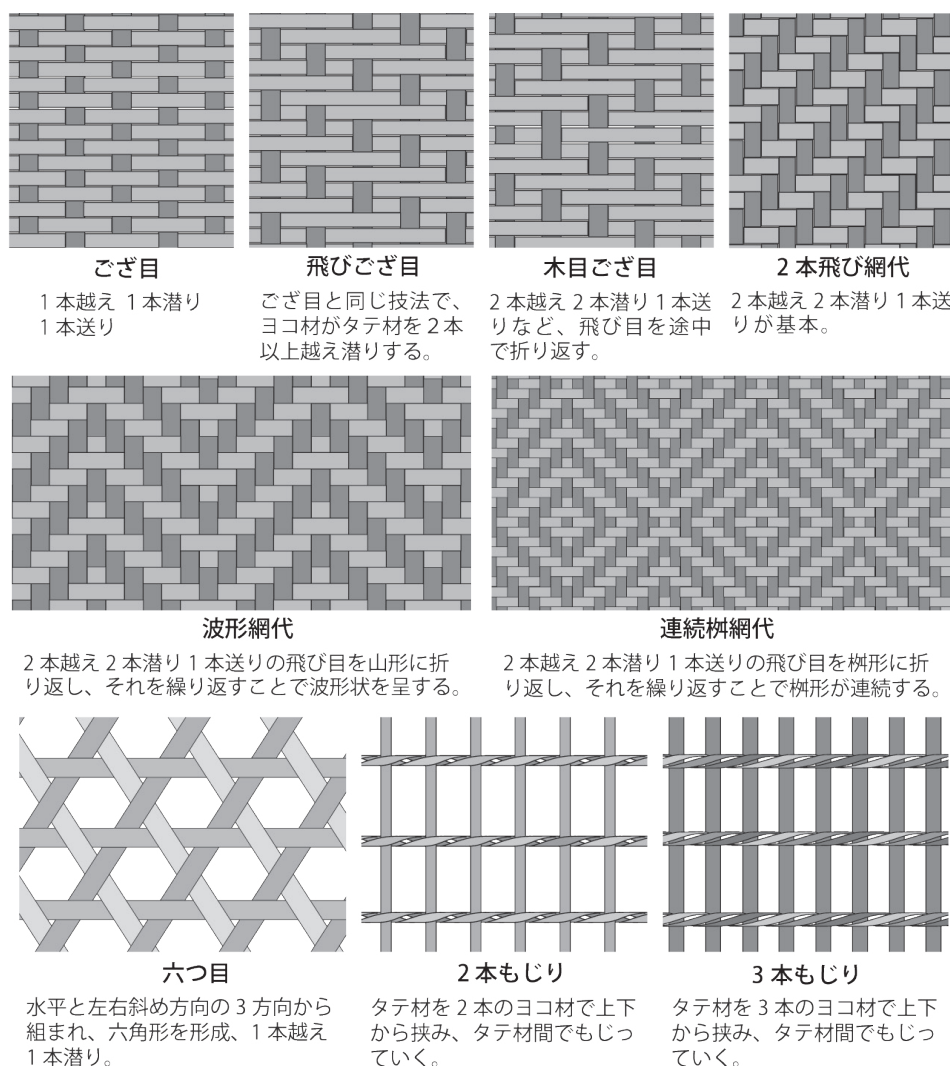


図2 東名遺跡から確認された約8000年前の編組技法模式図(佐賀市教育委員会2017)



図3 編組製品の復元品製作のためのムクロジの採取とヘギ材の製作工程（佐賀市教育委員会 2017）右はあみもの研究会提供。

異なる技法や素材植物が用いられていた（2、3）。異なる素材や技法が用いられているだけでなく、ツル植物を用いたもじり部分でタテ材の本数を重ねて少なくし、口がすばまる形状を作り出していた。

かごの材料となるイヌビワやムクロジは、幹を楔で割り、石器で板状にして、最後は口と手を用いて薄いヘギ材にしていたと考えられる（図3）。粘りがあるのは、若い木の根元から1〜2メートルぐらいの幹である。製作実験をしたところ、それより上部の材は粘りがなく、ヘギ材にすると割れてしまう。ムクロジは、現在の九州地方ではかごのヘギ材が作れるほど素性が良い若い木はあまり生えておらず、佐賀県内ではなく大分県日田市や宮崎県西都市まで行つて採取した。ツツラフジやテイカカズラといったツルの素材も、通常、木に絡まって巻き付いて曲がつて上がつていくツルは、節があつたり枝分かれしてしまつていて、割り裂いてかごの材料にすることができない。かごには地面を横に長く這つていて、葉がついていないツルが適している。そうしたツルを探して、輪状の素材束の状態にして材料を採取した。東名遺跡で使われている素材植物は、九州地方で普通に生育している植物であるが、かごに適した材料となると、集めるのには非常に苦労した（4）。

素材植物を調べると、技法と素材の対応関係のルールが見えてくる。図1の2段目にみられるムクロジ製のかごは、イヌビワのかごと基本的に同じ技法が用いられるが、網代は、複雑なひし形模様が組み合わさる連続柵網代や波形に

見える波形網代で編まれているものも多かった。しかし、実物を見ても実測図を見ても文様ははっきりしないのに、なぜこれほど編み方に手間をかけたのであろうか。こうした技法は、東名遺跡のかごが一番古い例であるが、全国的に見て8000年前から6500年前ぐらいの縄文時代早期から前期には、連続柵網代や波形網代のような、かごの機能とは直接関係がないのに、意図的に難しく編んだ複雑な編組技法が流行する（図2）。また、九州地方の縄文時代早期〜中期頃までは、落葉あるいは常緑広葉樹の木材を割り裂いたヘギ材が頻繁に使われている傾向も見えてきている（5）。

縄文時代後期、3500年前ぐらいになると、非常にシンプルな技法が主流になる。後・晩期には、九州地方では常緑広葉樹林に生育するツツラフジやテイカカズラ属などのツル植物が主に使われる。福岡県久留米市正福寺遺跡のように、ツル植物のウドカズラの根（気根）で編むかごなども作られるようになる（図4）。ウドカズラのツルの部分は枝分かれが多く、固くて編むことができない。空中に垂れ下がっている気根で編むとしなやかで細く、複雑な編み方が可能であった（4）。これも復元製作を行ってみて気づいた発見であった。

素材植物の変化は、8000年前ごろ以降にカシ類やクスノキ科などの常緑広葉樹（照葉樹）の森が拡大した影響があつたのではないかと考えている。東名遺跡の時期は、植生の移行期にあたり、木材を割り裂いたヘギ材もツル植物も使われ、多様な素材が選択できた可能性がある。

縄文時代のかごからわかる 植物資源利用

縄文時代の編組製品の調査によって、次の点
が明らかになった。まず、大きさや形態に合わ
せた素材植物の選択と、技法の選択がおおよそ
8000年前に確立していた。東名遺跡で確立
した技法は、概ね現代まで引き継がれている。
ついで、かごを当時と同じ素材で復元してみ
て分かったのは、かごに適した素材植物をムラ
の周辺で管理している可能性である。技法に適
した植物は、素性の良い植物でなければならず、
素材植物の採集時期や生育年数、生育環境を管
理していない
と、かご作り
は恒常的にで
きない。おそ
らく、縄文人
は、かごが編
みやすいよう
に植物の生育
環境を整備し
ていたのだろ
う。東名遺跡
では、材料を
束や、ヘギ材、
丸い輪など素
材植物の特性
に合わせた形
でストックし
ていて、それ



H6g アミ 2
復元高：9cm 最大幅：9～10cm
素材：ウドカズラの気根



J8g アミ 102
復元高：51cm 最大幅：33.5cm
素材：タテ材 テイカカズラのツル ヨコ材 ツヅラフジのツル

図4 福岡県久留米市正福寺遺跡出土の縄文時代後期の編組製品の素材植物と出土遺物、復元品 (佐賀市教育委員会 2017、工藤雄一郎・国立歴史民俗博物館編 2017)

を加工する前に水漬けしていた素材束が出土している。そうした材料の保管形態も現在のかご作りと共通しており、復元製作を通して、遺跡におけるかご作りの過程も明らかになった。

縄文の植物資源利用が示すこと

縄文時代の編組製品の研究から、縄文時代のかご作りは、身近に入手できて技法に適した植物を選択しながら行われた様相が見えてきた。一般に縄文時代の人々は、獣を狩り、魚を捕り、木の実を拾って生活していた「狩猟採集民」と言われているが、少なくとも植物に関しては資源管理が行われていないと、東名遺跡で見られ

るような大型のかごを大量には作りえない。したがって、東名遺跡は植物の資源管理を行っていた最初の段階と考えている。8000年前ごろという時代には、中国大陸では、イネが野生稲から栽培化されて狩猟採集から農耕に移行し、6400年前ごろの縄文時代前期ぐらいの時期には稲作が本格的に行われるようになった。日本列島では、8000年前に、食糧生産ではなく、かごなどの道具作りのための植物資源の管理が行われていたと考えられる。日本列島の縄文人は狩猟、漁撈と採集を、中国大陸の新石器時代人は農耕を主体的に行い、農耕の方が発展した社会として一般には語られるが、縄文人は身近な植物資源を最大限活用したエキスパートであったのである。

縄文時代のかご作りからみえた植物資源管理の技術の高さは、世界に誇れるレベルである。また、かご作りは、人が居住している空間の身近な資源を利用して行っており、そこがより遠方に材料を求める土器や石器との大きな違いである。我々の生活に根付いている身近な文化、技術であることが、現在までかご作りが継続する一つの理由となったと考えている。

引用文献

- (1) 工藤雄一郎・国立歴史民俗博物館編『縄文時代の植物資源利用』新泉社
- (2) 佐賀市教育委員会編『2017「縄文の奇跡」東名遺跡』雄山閣
- (3) 佐賀市教育委員会 2016『佐賀市埋蔵文化財調査報告書100：東名遺跡群Ⅳ』佐賀市教育委員会
- (4) 工藤雄一郎・国立歴史民俗博物館編『2017「縄文の奇跡」東名遺跡』雄山閣
- (5) 佐々木由香 2015『縄文・弥生時代の編組製品製作技法の特徴と時代差』あみもの研究会編『縄文・弥生時代の編組製品研究の新展開要旨集』あみもの研究会